

## 90. 電話線埋設に伴う 高月町井口遺跡調査概要

### 1. 調査に至る経緯

滋賀県伊香郡高月町井口所在の井口遺跡は、近年のは場整備事業および国道365号線バイパス工事に伴う発掘調査(1)によって、古墳時代後期から奈良・平安時代を中心とする高時川沖積地上の大集落跡であることが明らかになりつつある。

1981年6月26日、国道365号線バイパス工事に伴う発掘調査現場事務所前の現在の国道365号線において重機による電話線埋設工事が始まった。近年の調査から、従来井口遺跡と考えてきた地域の中でもあり、即日事業主体者の日本電信電話公社滋賀電気通信部と遺跡保存のための協議に入った。計画によると現国道と国道バイパスの間の東西に走る農道を延長130m・幅0.7m・深さ1.3mの規模で掘削し、電話線ケーブルを埋設するとのことであった。

計画路線のうち東端の現国道付近は、1976年度のほ場整備事業に伴う調査の所見によると旧河道の部分にあたり、工事による影響は問題ないと判断された。しかし現在の農道のすぐ北の水路部分では、先の調査により掘立柱建物跡やピット群が検出されたことから、予定路線の東端を除く部分は工事による遺構への支障が懸念された。ここでは遺構面の上に旧水田の耕土が



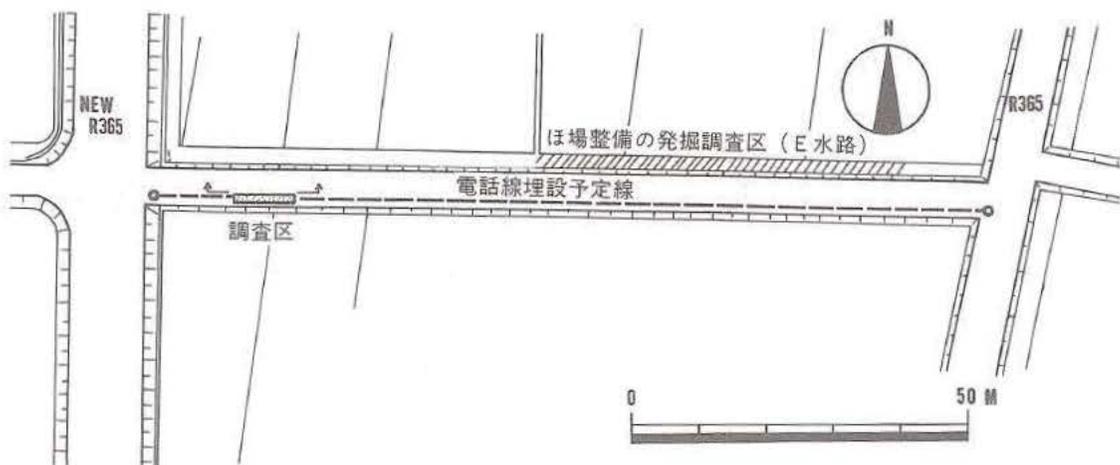
第1図 位置図 1:25,000

厚さ40~60cmのり、更にその上に厚さ20~40cmの農道の造成土(山土)がのりというのが基本的な層序である。従って深さ約70cmまでの掘削は遺構への影響がないとの見地から、その深さまでの掘削で工事を行うよう指導し、計画はそうように変更された。しかしながら予定路線西端の国道バイパス地下路線との接続部は、延長10mほどについて深さ1m以上の掘削が必要とのことから、その部分のみ発掘調査を実施することになった。(第2図)

調査は1981年7月6日に滋賀県教育委員会の指導のもとに実施した。図中における方位は磁北、高度値は標準海拔高度である。また出土した遺物・写真・図面は全て県教育委員会で保管している。なお調査にあたっては林純氏の御協力を得、又、小文をまとめるにあたっては田中勝弘氏の御教示を得た。深謝。



遺跡全景



第2図 調査区付近図

## 2. 調査の概要

調査は厚さ約15~20cmの農道造成土(第1層)と旧耕土(第2層)を重機によって除去した長さ10m、幅0.8mの範囲について行った。(第3図)

厚さ50~60cmの旧耕土である暗灰色粘土の下には厚さ約5~10cmの黄色ブロックを含む茶褐色粘質土(第3層)ならびに赤茶色ブロックを含む茶褐色土(第4層)が約30cmの厚さで堆積していた。これは井口遺跡の他の地区の旧耕土下において遺構が形成されている黄褐色土とは若干土質・土色が異なっており、ここでは遺構は検出されなかった。この汚れた茶褐色土は東半部において一部砂質のところもある。この層の下部には青灰色粘土(第5層)があり、部分的に隆起していた。

遺物は全て第4層中の上部から出土し、出土地点は発掘区東半部に限られたが、集中して出土するという状況ではなかった。

遺物数は須恵器片14・土師器片5・平瓦片1である。(第4図・第5図)

須恵器の内訳は、杯身片4(3個体)・杯蓋片2(1個体)・甕片1・壺片1・大甕片2(1個体)・器種不明片4である。

1は杯で全体の約3%が残存している。内外共横ナデ、

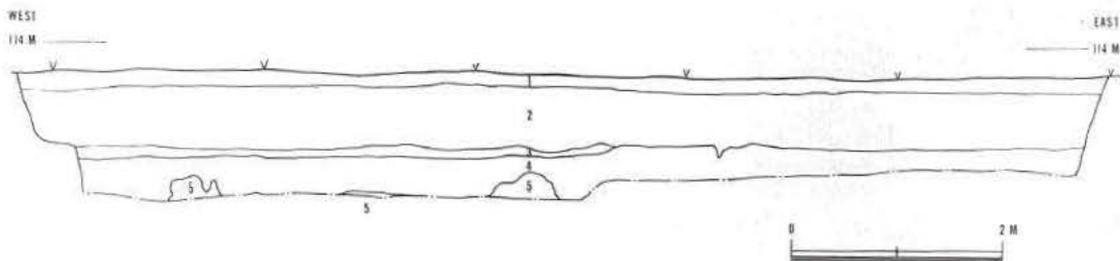
内面底部には仕上げナデが見られる。底が少し凹気味の付け高台より少し上部の体部に1条の浅い沈線がめぐり、底部には粘土紐の巻き上げ痕がわずかに見られ、焼成良好・堅緻で内外面共青灰色を呈する。胎土は1~2mm大の長石を少し含む比較的精選された土を用いている。

2は付け高台部の細片でわずかに径が推定できるだけの残存である。内外共横ナデで1mm大以下の砂をわずかに含んでいる。生焼けて外面乳白色を呈し、内面が外面よりわずかに良く焼けている。他に同一個体の破片が1片出土している。

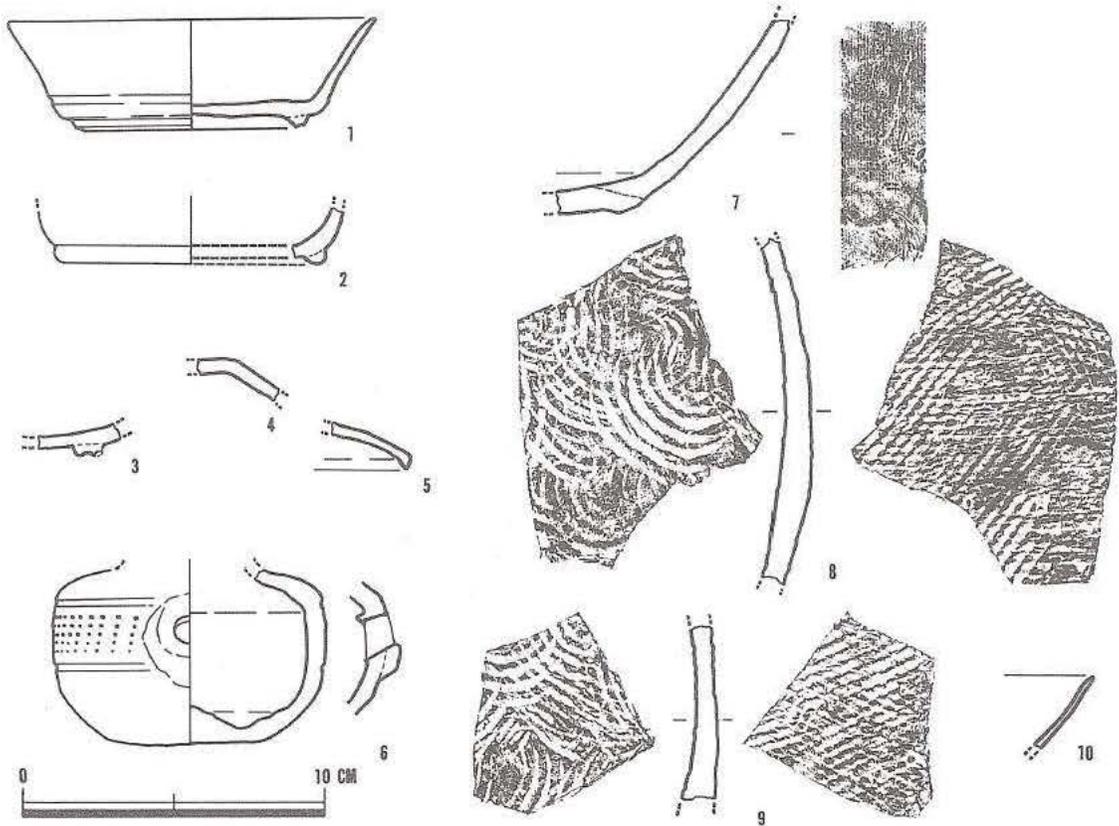
3も付け高台部底がわずかにくぼんだ破片で径は不明。細砂をかなり含み、焼成は良好・堅緻で内外面共灰色を呈する。

4・5は同一個体と思われる蓋片で径は不明である。2mm以下の細砂をかなり含み、焼成良好で内外面共淡灰色。

6は體体部が約3%残る破片である。平底で内外面共横ナデ調整が施され、内面底部はへら削りのまま残されている。胴部に施された2条の沈線の間には櫛状工具による斜め方向の刺突文が見られる。注口部は外から内へ円形穿孔され、その外面は粘土をつぎ足し、ふくれ気味に成形されている。陶邑古窯址群ではMT21期



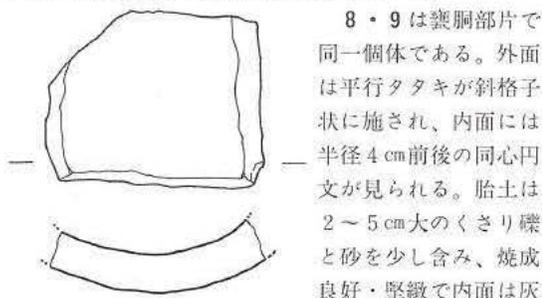
第3図 調査区北断面図



第4図 出土土器片

ごろに小型甕の注口部がふくれる傾向を示すという。(2) 胴部上半には緑色自然釉が少しかかり、またゴマハゲが部分的に見られる。2mm以下の長石と細砂をかなり含む胎土で、焼成良好・内外面共淡灰色を呈する。

7は壺の底部と思われるが径は不明。内外面共横ナデが施されるが、外面には更に少し乱ナデが見られ、一部縦方向の擦痕が底部寄りに残る。ロクロ板からの分離作業に伴うものと考えられる。また底部内面にも仕上げナデの擦痕が残る。胎土は5~6mm大の長石を含み、内外面に石ハゼが見られ、砂もかなり含まれている。焼成良好で内外面共灰色をしている。



第5図 出土瓦片 1:2.5 青色、外面は暗灰青色

を呈する。

他に図示し得ないもので器種不明ながら、器厚1cm前後の破片1、器厚7mmの破片1、そして器厚5~6mmの破片2点が出土し、調整は内外共ナデが中心である。

土師器の5片は全て細片で、腕口縁部片1を除いて器種不明であるが、胎土によって4個体に分けられる。

10は腕口縁部片で細砂を含む比較的精選された胎土で良く焼けている。内外共暗褐色を呈する。



遺物出土状態

他に1片出土した平瓦(第5図)は外表面はかなり磨耗しており、かなり平滑な面をなしている。2~3mm大の礫をはじめ砂をかなり含んでおり、焼成は良好、内外面共淡灰褐色をしている。

### 3. 調査の小結

農道造成以前においては、この発掘区は水田であったことが明らかであるが、かつて現在の農道の中ほどに東西に走る畦畔があり、その南の水田面は北の水田面より数10cm低かったという。現在の農道のすぐ北にあたる水路部分(E水路)において、先のは場整備に先立つ調査によって検出された掘立柱建物およびピット群は、その畦畔より北の水田面下であった。従って旧水田の南北の段差は遺構ののる微高地を如実に反映したものであったと言える。

将来この農道を横切って南北方向に調査する機会があれば、遺跡・遺構ののる微高地の縁辺の状況というものが明らかになるだろう。

### 4. おわりに

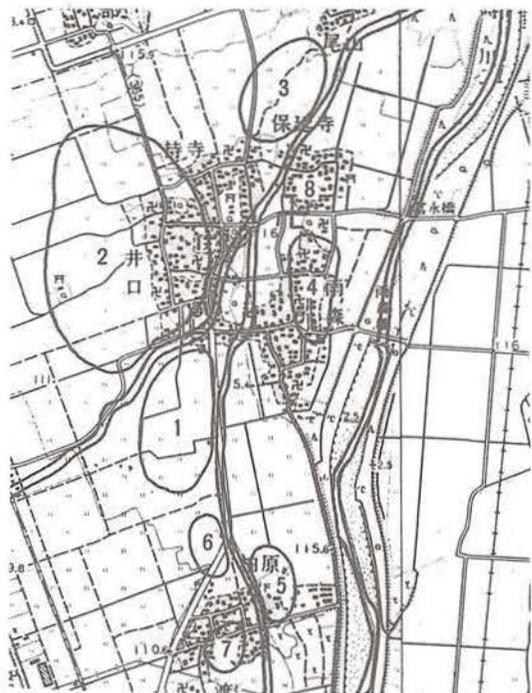
今日、高時川から分流し、保延寺と持寺の間を抜けたところで2本になり、1本は井口の東から南西へ行く水路(仮称:西水路)及び雨森と井口の間に行く水路(仮称:東水路)がある。

1981年にこの付近では上水道工事が行われ、この井口遺跡の他、華寺遺跡、そして一部大海道遺跡・柏原遺跡が工事予定地にかかるため、約半年をかけて総延長10kmにわたり井口・持寺・保延寺・雨森および柏原地区の立会調査を実施した。

その知見によるとこの水路は、かつての流路の名残りととどめるものであり、現在よりかなり広い規模をもつ高時川の支流といったものが想定された。

調査に至る経緯の中でも述べたように、今回電話線埋設工事が行なわれた予定路線の東端は旧河道の一部にあたる訳であるが、これはその位置から明らかに東水路のかつての流路の一部にあたる。また西水路のすぐ西側および西水路が井口の南端を横切る地域は、遺構の存在が確認されず砂礫土のみであった。

従って従来井口遺跡と考えてきた範囲は旧河道によって大きく井口北遺跡と井口南遺跡とでも呼ぶべき地区に分けられる。そして今回報告したところは、この井口南遺跡の南端にあたる。更に先の東水路の東側に現在の雨森集落があるが、この中心部でも古墳時代後期~平安時代にかけての遺物及び住居址などが検出されているので、2本の旧河道によって分けられた3つの遺跡-ほぼ時代が重なるので基本的には1つの遺跡と考え、その中で3地区あると考えた方がよいだろう-の存在が明らかになった。(第6図)2本の旧河道のすぐ上流右岸には大海道遺跡があり、それと雨森遺跡との間に奈良時代の華寺があったというように、この



第6図 周辺遺跡分布図 1:25,000

1. 「井口南」遺跡 2. 「井口北」遺跡
3. 大海道遺跡 4. 雨森遺跡 5. 柏原遺跡
6. 柏原北遺跡 7. 柏原西遺跡 8. 華寺遺跡

現在の井口集落周辺は極めて遺跡の密集した地域となっている。また柏原地区においても同様に旧河道の兩岸の微高地上に集落が密に展開している。

特に井口集落は他の集落に比べ中世~近世にかけても大集落が形成されていたようで、その時期の陶磁器・染付の他、大量の遺物が検出されている。このことは井口が中世以来、高時川の用水の管理にあたってきたという三田村文書・河路文書などの文献と高時川が己高山系から高月の平野部へ流れ出るところにあるという地形などと合わせて、中世以前からこの地は伊香郡南部の農業等の諸活動(治水・用水等)を考える上でも極めて重要な地域であったことは想像に難くない。従って古墳時代後期から井口遺跡を中心とする大集落、あるいは集落群が形成されていたことは当然の帰結なのである。(用田政晴)

### 註

- (1) 田中勝弘「高月町井口遺跡」『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ-II 1977  
田中勝弘「高月町井口遺跡」『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ 1978
- (2) 田辺昭三ほか『陶邑古窯址群』1(平安学園創立九十周年記念『研究論集』第10号) 1966 50頁